

複式学級における『主体的・対話的で深い学び』に向かう子どもの育成

～少人数のよさを生かした、算数科の指導の工夫～

乙部町立栄浜小学校 学級数4(1) (校長 安田 善紀)

I 実践テーマの趣旨

今年度、全校児童9名の極小規模校である本校は、第6学年が欠学年であり、第1、2、3学年が一人学年である。少人数指導が不可欠である本校の現状を踏まえ、平成29年度から、「主体的・対話的で深い学び」に向かう子どもの育成」を研究主題として、少人数のよさを生かした、算数科の指導の工夫について研修を推進してきた。また、今年度紙面発表となったが、第69回全道へき地複式教育研究大会檜山大会の会場校として、取組を進めてきた経緯もある。

II 実践の概要

1 個に応じた指導・支援

少人数指導のよさを生かし、個に応じたきめ細かな指導を行うために、算数科において、アンケートを実施し、アンケートの結果を基に個人カルテを作成した。また、授業中の様子などの観察を通じて、児童の実態把握を行い、個々の指導・支援に向けた指導方針を立てた。

新しい単元に入る前には、指導方針に基づきレディネステストを実施し、既習事項の定着具合を確認し、必要に応じて朝学習等の時間を活用して復習を行った。

6月に実施し、個人や学年の状況について教員で分析を行う。

【図1】算数科におけるアンケート

2 授業のねらいや展開を整理し、構造化した授業づくり

授業では、学習指導要領の指導事項を踏まえ、「めあて」や「課題」を設定し、「めあて」に対しての「ふり返し」、「課題」に対しての「まとめ」を実施することを改めて確認した。

また、授業の展開を「つかむ」、「考える」、「まとめる」、「深める」の4段階の流れとした。このような取組を行うことによって、児童が1単位時間の学習について見通しをもてるようにした。

また、教員も授業のねらいや展開を整理することによって、授業を構造化してイメージすることができ、授業に必要な学習ガイドの作成や、学習リーダーを効果的に活用し、児童同士で学習を進められるように工夫した。

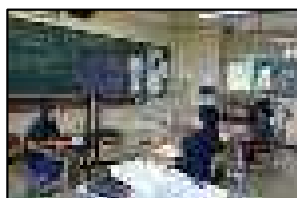
つかむ	考える	まとめる	深める
<ul style="list-style-type: none"> ○前時の学習をふり返る。 ○問題・めあてをかく。 ○ぼう線・なみ線を引く。 ○図・式をかく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ノートやホワイトボードに自分の考えを書く。 ○違う方法はないか考える。 ○発表の仕方を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○全体で交流しながら考えをまとめていく。 ○今日の勉強で分かったことや大事なことをまとめたり、ふり返ったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○まとめたことやふり返ったことを活用して、練習問題や発展問題に取り組む。

3 「ふり返し」の充実

(1) 前時の「ふり返し」

本時の学習に入る前には、ノートや前時までの学習内容を記した掲示物を児童に確認させ、前時の学習内容を振り返るようにしている。

また、前時の「ふり返し」の際に、ICTを活用することによって、間接指導において、児童だけでも前時の学習内容を振り返ることができるようにしている。



児童は、ICTを活用することによって、間接指導時において自分達で前時の「ふり返し」を行う。

常に教室内に掲示し、活用できるようにしている。

ふり返りの7つの視点

- ①わかったこと
「～に気づけると～ができるということがありました。」
「～すると、～ができるということがわかりました。」
「～をまちがえたのは、～だからということがわかりました。」
- ②できるようになったこと
「～をきつて～を正確に書くことができるようになりました。」
「計算を○分で○問とすることができるようになりました。」
- ③自分で見つけたコツ
「～を～すると簡単に計算できることを発見しました。」
- ④考えが変わったこと
「～と～を比べてみると、～の方が、簡単にできると思いました。」
- ⑤友達から気づいたこと
「～さんの考えを聞いて、～するとよいということがわかりました。」
- ⑥次に考えてやってみたいこと
「～のやり方が、～にも使えそうだと思ったのでやってみたいです。」
- ⑦まだよくわからないこと
「～のやり方が、むずかしくてよくわかりませんでした。」

【図3】ふり返りの7つの視点

(2) 本時の「ふり返し」

「ふり返りの7つの視点」を作成し、児童と教員が対話しながら本時の学習内容を振り返ることによって、次の学習につながる「ふり返し」となるようにした。また、本時の「ふり返し」の時間を十分に確保できるように、1単位時間の授業を計画的に行っている。

III 実践の成果 (○) と課題 (●)

- 少人数のよさを生かした各種実践を行うことによって、ガイド学習が定着し、児童は学習リーダーを中心にして自分たちで学習を進めることができるようになった。
- 前時の「ふり返し」におけるICTの活用によって、児童が指導のねらいを理解し、見通しをもって学習に取り組むことができるようになった。
- 対話的な学びの充実に向けて、「似ている」「違う」などの交流の観点を意識させることによって、児童が自分の考えを広げたり深めたりする場面を設ける必要がある。
- 本時の「ふり返し」において、特に注目させる視点を黒板に示すなど焦点化することによって、児童が何をどのように自分の学習を振り返ればよいかを明確化する必要がある。

複式学級における児童の主体的・対話的な学びを引き出す授業の実践

少人数指導のよさを生かした学びの場面づくり

今金町立種川小学校 学級数5(1) (校長 本庄 伯幸)

I 実践テーマの趣旨

本校では、これまで小規模複式校のよさである「少人数ならではの個に応じたきめ細かな指導」の充実に取り組んできた。その中で、「自分の考えを表現し、他者の考え方に触れる」機会を設定する必要があると考えた。

そのため、今年度は、研究主題を「自分の考えをもち、主体的・対話的に学ぶ学習指導の工夫～とにも学び、高めあえる算数科の授業づくりを通して～」と設定し、授業改善に努めてきた。

また、今年度、紙面発表となったが、第69回全道へき地複式教育研究大会檜山大会の会場校であったこともあり、本大会の開催に向けて取組を進めてきた。

II 実践の概要

1 見通しをもって主体的に学ぶ取組

(1) 自力解決につなげる「手がかりになる言葉」の提示

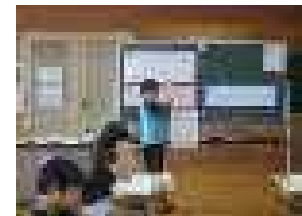
児童が課題の解決に向けて主体的に取り組むことができるよう、ヒントカードの他に「手がかりになる言葉」を提示している。児童が「手がかりになる言葉」を見ることによって、課題の解決に向けてどの既習事項をどのように活用すればよいか考え、自力解決につなげることができるようにしている。



「手がかりになる言葉」

(2) リーダーを中心としたガイド学習の定着

間接指導時において、児童が自分たちで学習を進めることができるように、児童のリーダーは教員が作成したガイドに基づいて指示を出し、それに従って他の児童も学習を進めるガイド学習を取り入れている。リーダーは交代で全ての児童が経験し、見通しをもって学習するよさを実感することができるようにしている。



リーダーを中心としたガイド学習の様子

2 自分の考えを整理し、伝え合う対話的活動の取組

(1) 問題の題意を捉えるためのICTの活用

問題の題意について図や表などを用いて視覚的に理解するために、タブレットや電子黒板を活用している。児童が視覚的に理解した題意について、教員は児童の交流を促し、言葉で題意を説明させることによって、自分の理解を整理することができるようにしている。



題意を捉えるためのICTの活用の様子

(2) 相手意識をもった自分の考えの説明

相手意識をもって自分の考えを説明できるようにするために、ノートやホワイトボードに課題の解決についてまとめさせ、それを基に説明させる活動を取り入れている。説明する児童は、相手に自分の考えを理解してもらえよう、考えた理由を明らかにしながら説明を行う。また、説明を聞く児童は、自分の考えと同じ部分と異なる部分について考えながら聞く。少人数だからこそ説明し合う場面を設定し、相手意識の醸成につなげている。



間接指導時に、児童同士で説明し合っている様子

III 実践の成果(○)と課題(●)

- 児童が学習に向けて主体的に取り組むことによって、学習に向かう意欲を高めるとともに、何をどのように学ぶのかについて意識できるようになった。
- 児童が対話的な学びの場を経験することによって、他の児童の考えを踏まえて、自分の考えを広げたり深めたりするとともに、自分の考えに自信をもつことができるようになった。
- 児童の学習に取り組む態度が高まるように、ガイド学習によって授業の形態が毎回同じにならない工夫を考える必要がある。
- 児童が自分の考えを一層深められるよう、異なる考えについて注目させたり、教員が異なる考えを提示したりする必要がある。